

宿縁

十月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗

本願寺派

中原寺

TEL 0477-372102
FAX 0477-372102

会い難くして 会うことを得たり



今年七月十五日に作家高史明(コ・サミョウ)さんが九十一歳で往生なされました。先生は今秋三十三回目を迎える中原寺文化講演会の第二回講師であり、また当寺へ何度もお出かけたいただき親しくご指導をいただきました。常にご自身の人生の歩みを通して人間の心の闇を深く掘り下げ、真実なるものを求められたその真摯の姿勢は臉に焼き付いています。あまりご存じない方のために高さんの人生を記しておきます。

在日朝鮮人二世として下関に生まれ、極貧の生活を過ごされ三歳の時に母と死別、石炭沖仕であった父に育てられました。その貧しさは想像を絶するほどで、生まれたばかりの弟はネズミに噛み殺されたといいますが。朝鮮人ということで創氏改名(日本が植民地支配のため、朝鮮人に日本式の姓名への改名を強制した)させられ、差別と貧困のため高等小学校を中退しました。日本敗戦直後の教育を受けた私の時代を思いうかべると、たしかに「あそこは朝鮮人部落だ」とか「あいつは朝鮮人の子だ」とか誰からともなく教えられ、私たちとはどこか違うというイメージを子ども心に持ったものです。高さんは、決して悪ガキではなかったが、あからさまの差別やいじめにあうことで喧嘩少年であったと語っています。その後、職を転々とする中で「朝鮮が日本の植民地であったことが差別や貧困につながっていること」に気づき、過激な政治活動(共産党入党)に参加します。しかしやがて志を同じくする者同志なのにお互いが対立し闘争をすることにいや気がさしてそこから抜け出し、一九七一年「夜がときの歩みを暗くするとき」を発表、小説家としてデビューしました。一九七五年「生きることの意味」で日本児童文学者協会賞を受賞しますが、同年夏、一人息子の岡真史君が十二歳

で近所の団地から飛び降り自殺をします。真史君の遺稿詩集「ぼくは十二歳」を妻の岡百合子さんとの編纂で刊行。ドラマ化もされました。繊細な感性の持ち主であった少年の遺したノートや詩は世間に大きな反響を呼び、爆笑問題の太田光さんが高さんの家を訪ね、亡き息子さんへの思いや父親としての葛藤を尋ねて、若い人たちに関心呼び寄せました。そして当時不登校や引きこもり、いじめ等の難問に悩む社会現象に、生きることの意味を考えさせました。一人息子に突然先立たれた悲しみを縁として高さんは、改めて「歎異抄」に導かれ、親鸞聖人の教えに深く帰依してゆくことになりました。歎異抄第三章の有名な言葉「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。…」高さんはこの言葉と葛藤して次のように述べています。(「歎異抄のこころ」)

「人間の社会は、利口者によって成り立っている社会なのでした。その点が、他の生き物の社会と、きつぱりと違うところなのです。その人間社会では、常に「利口者」であり「善人」である者が、表舞台に立っているといえましょう。その反対に「愚か者」であり「悪人」であるとされた者は、社会の陰に息を潜めて生きるほかないのです。それが人間社会のいわば「常識」というものでありましょう。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」とは、そのいわゆる常識と真つ向から向かい合っている言葉なのです。人々が、この言葉を前にして心底からの衝撃を受けるのは、それ故のことでありましょう。第三章の冒頭の言葉は、その人間世界の黒闇を、まっすぐに見つめ通している眼差しだといえます。ここでいう「善人」とは、まさに自らの知恵の囚われ人にほかありません。その囚われ人は、自らの知恵に囚われているが故に、人間の黒闇の蟻地獄に、ますます深く落ち込んでゆくほかないといつてよいのです。まさしく世間の「常識」とは、そこに一応の道理があるかに見えるのですが、そのありようの本質は、真実の『いのち』に背を向けている黒闇であるといふほかないのです。「本願他力の意趣にそむけり」とは、そのころにおいていうなら、その真実の「いのち」に背を向けて生きようとする、人間の黒闇を指摘する言葉だといえます。「本願」とは、阿弥陀仏の私たちへの根本の願いです。また「他力」とは、何ももの妨げることのできない不思議な仏の智慧の働きをいいます。そして阿弥陀さまの真実の力なのです。それは人間の煩惱による知恵の危うさを知らしめられて、手を合わせるほかにどうしようもなくなった者こそが、阿弥陀さまの願いにもっとも敵った者だということでしょう。高史明さんの課題は、とことん「真実とは何か」を追い求めた人生でした。それは貧困・差別・愛児の死から、おのれ自身に問わされたものでした。だから道を求める者には尊い導き手であったのです。

【寺灯雑記】

○法縁廟法要と彼岸会法要を勤修

二〇二一年の十一月の完成以来、初めてとなる法縁廟納骨者の総追悼法要が廟前にて勤まり、納骨者ご家族とともに廟前にて「讃仏偈」を読経しました。



その後、本堂にて行われた彼岸会法要では、「仏説阿弥陀経」の読経、そして昨年の文化講演会にお出でいただいた、中島岳志先生よりお話をいただきました。ご自身も被災された阪神大震災での経験などを通して、死者とのつながりや亡き人（先祖）としての役割についてお話しされ、参拝者の方より深い感銘を受けたとの言葉が多く聞かれました。



【ブツダの教え 「お経」のことば】

「六つの行い」

六波羅蜜(ろっばらみつ)とは、布施(ふせ)、持戒(じかい)、忍辱(にんにく)、精進(しょうじん)、禅定(ぜんじょう)、智慧(ちえ)の六つのことで、この六つを修めると、迷いの此の岸から、さとり彼岸の彼岸へと渡ることができると、六度(ろくど)ともいいます。

布施は、惜しみ心を退け、持戒は行いを正しくし、忍辱は怒りやすい心を治め、精進は怠りの心をなくし、禅定は散りやすい心を静め、智慧は愚かな暗い心を明らかにする。

布施と持戒とは、城を作る礎(いしずえ)のように、修行の基となり、忍辱と精進とは城壁のように外難を防ぎ、禅定と智慧とは、身を守って生死を逃れる武器であり、それは甲冑に身をかためて敵に臨むようなものである。

施(ほどこ)した後で悔いたり、施して誇りがましく思うのは、最上の施してではない。施して喜び、施した自分と、施しを受けた人と、施した物と、この三つをともに忘れるのが最上の施しである。

正しい施しは、その報いを願わず、清らかな慈悲の心をもって、他人も自分も、ともにさとりに入るように願うものでなければならぬ。

『華嚴経 明難品』『大般涅槃行』



【仏事Q&A】

Q、ご本尊の阿弥陀如来が金色なのはどのようにしてですか？

金色は、限らない光である阿弥陀如来の智慧の徳を表しています。すべてのものの真実のすがたを明らかにします。それは自己中心的な思いにとらわれ、苦しみ悩み傷つけあう私たちのすがたを明らかにしてくださいませ。

本来、阿弥陀如来は色もかたちもなく、私たちが言葉で表現することも認識することもできない「さとり」そのものですが、親鸞聖人は、私たちにわかりやすくその救いのほたるきを知らせようと示してくださいませ。したが、阿弥陀如来であると述べています。金色に輝いているのは、色やかたちにとらわれて生きている私たちを救うために、阿弥陀如来の方からわかりやすいすがたで現れてくださったことを意味しているのです。

阿弥陀如来は、この迷いの世界(此岸)において様々なすがたを示され、この世で私たちをさとりの世界(彼岸)である「浄土」へと導いてくださっています。お念仏を申す日暮らしの中で、私たちが間違ひなく救う阿弥陀如来のおこころに出あわせていただきませう。

『仏事Q&A 浄土真宗本願寺派』

【法要・法座のご案内】

○婦人会法座

※十月七日(土) 一時

・御文章に学ぶ

(一流安心章―四帖第十四通)

前任職

○門信徒会役員会

※十月七日(土) 三時半

*欠席される役員のかたは、お寺までご連絡ください。

○子育てサロン(パンダっ子)

※十月十日(火) 十一時〜十四時

保護者同士の交流と子どもたちがふれあう楽しい遊びの場です。どなたでも自由にご参加できます。昼食が用意されています。

☆第三十三回文化講演会

十月二十一日(土) 午後一時半

場所：山崎製パン企業年金会館

(市川駅徒歩三分)

講師：若松英輔氏(批評家・随筆家) 講題：「信じていることと知ること」

著書：「イエス伝」(中公文庫)

「生きる哲学」(文春新書)

「14歳の教室 どう読みどう生きるか」(NHK出版) 他多数

*事前申し込み・参加費は不要です。

どうぞ若いかたも是非ともお誘い合わせのうえ、お気軽にご参加ください。

○浄土文類聚鈔を学ぶ(親鸞セミナー)

※十月二十八日(土) 二時 前任職

【今月の掲示板のことば】

仏の願いが 私に变革を与える